

新春鼎談 熊本大学 × 熊本大学医学部附属病院 × 熊本県医師会

Kumamoto University

——3つの事業を中心に熊本大学の教育改革が進んでいます。大学病院の在り方についてはどのようにお考えですか。

水田：大学病院は、医学研究を推進し、先進医療などの次世代医療を開発することが大きな使命の1つです。本院では、これまでも国内外の施設と協力するなどして、基礎研究と臨床研究に取り組んできましたが、さらにこれを推進していく必要があります。臨床

臨床研究強化を推進する大学病院
玉名に地域医療実践教育拠点設置

研究については、昨年末に厚生労働省の新しい倫理指針が公布され、これを遵守することが義務づけられています。このため、一昨年10月に総合臨床研究部を病院内に設置して、新たな臨床指針に対応した臨床研究体制の構築を推し進めています。

——地域医療との連携という点では、どのような取り組みがありますか。

水田：地域医療では、学生のうちから実際に現場の医療にふれることが

リーダー育成HIGOプログラム
研究医を育てる柴三郎プログラム

です。医学部では、卒業後、学生のほとんどが医者になります。もちろん医師不足解消の上では大切なのですが、将来の医学を支えるには、研究者の育成も大切です。そこで、柴三郎プログラムでは、大学院での研究をスムーズに進めるため、医学部学生時代から、大学院授業の先取り受講を可能にするなど、学生が研究に専念しやすい環境を提供します。次代が求める人材育成を目指す上で、HIGOプログラムとともに、本学の大きな目玉となるプログラムです。

——医師会としては、熊本大学医学部や大学病院にどのような要望がありますか。

福田：1つは、研究の場として立派な医学の研究をしていただきたい。全国的にも優れた大学として高い評価を得ていることは、医師会にとっても誇りです。また1つは、教育つまり人材育成です。願わくば、地域医療に関心のある医師を育て、熊本に残してい

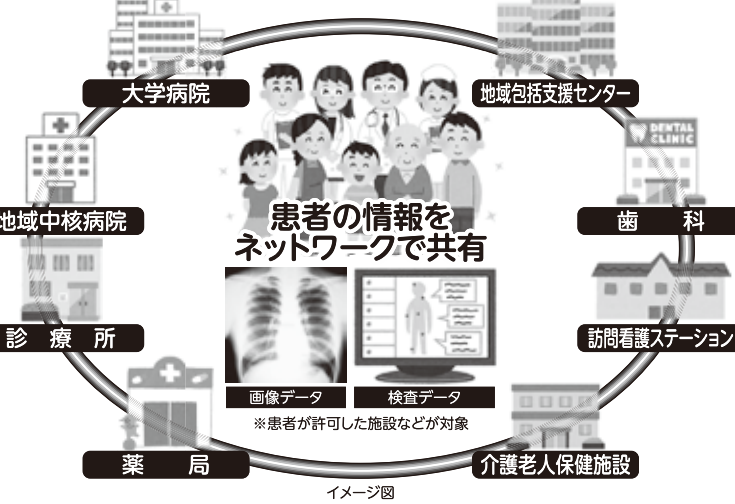
1T医療情報ネットワークを構築
地勢特性を活かし地域医療を展開

——1Tを使った熊本県独自の医療情報ネットワークがあるそうですね。

福田：熊本メディカルネットワークと言います。熊本大学と県医師会と熊本県とが3者で契約して、国の地域医療介護総合確保基金を使って立ち上げました。1Tで情報を共有することによって、より効率的に医療を展開しようというものです。重複検査や重複処方の解消など、いろいろなメリットがあります。医療の見える化や、インフォームドコンセントも充実できます。また、アレルギー情報の把握ミスを回避したり、検査歴の参照によって禁忌を知ったりと、安全性の向上にも役立てられます。医療の質を上げる一助にしたいと考えています。現在、モデル地区として、阿蘇と芦北・水俣と人吉・球磨の3地域で実施しています。

——熊本県は、地域医療や医療連携を展開する上でどのような特徴がありますか。

福田：高度な医療機関は県庁所在地の熊本市に集中しています。熊本市



大切です。そこで昨年4月、公立玉名中央病院に地域医療実践教育拠点を設置し、本院の地域医療システム学寄附講座の教員がうき常駐しています。教員スタッフは、病院で地域医療の現場に立ちながら、一方で医学部の学生や初期研修医に地域医療の教育を行います。また、地方の病院に医師が赴任すると、専門医としてのキャリア形成が難しいという指摘を聞きます。そこで、学内に地域医療支援センターを設け、地域医療に従事しながらもキャリア形成ができるような支援を行う、熊本型医師地域循環システムの構築を進めています。

◇ ◇ ◇

ただきたい。そして3つ目が、直接と間接による医療の実践です。熊本にはさまざまな高度先端医療機関がありますが、その頂点に大学病院があります。地域の医療機関をバックアップすることにも、患者さんが最終的に駆けこむ病院でもあります。さまざまなカタチで支えていたきたい。熊本県は、そうした役割がうまく実践されている県だと思います。

明日を見据え再開発進む大学病院
高度急性期医療の機能分化を推進

——大学病院では、一昨年9月に新しい外来診療棟がオープンしました。再開発整備はどのように進んでいますか。

水田：診療に関わる新しい建物は、外来診療棟ではほぼすべて完成しました。現在は臨床研究棟を建設中で、今年秋に完成する予定です。その後、跡地などの環境整備を行って、平成30年ごろすべての再開発が終わる予定です。

——今後の大学病院の機能はどのようなになっていくのでしょうか。

水田：大学病院は県下で唯一の特定機能病院として高度な医療を提供するとともに、地域医療の最後の砦と

新たな人材育成システムの確立へ
全国に先駆ける熊本モデルの発信

——さて、2016年新春に当たり、抱負をお聞かせください。

原田：いま、大学は、財政的な面を含めて、厳しい時期にあり、多くの改革を求められています。そうしたなか、熊本大学では、生命科学研究部をはじめとするさまざまな取り組みが、高い評価をいただいています。HIGOプログラムを含め、人材育成の新しい教育システムを確立して、医療に貢献する人材を、大学病院との連携でしっかり育てたい。新しい医療、新しい人材育成システム、新しい医学研究を確立して、それを全国へ、さらには世界へ発信できるようにしたいと思っています。それを実現する、あるいは実現するための礎となる1年にしたいですね。

水田：私たち大学病院の理念は、「患者さん、本位の医療の実践、医学の発展、および医療人の育成に努め、地域の福祉と健康に貢献することです。大学病院に勤務する2,000人以上の職員がこの理念を共有し、患者さんに心の安らぎと癒しを提供することにも、職員が誇りと充実感をもって働ける病院になるよう、努力していきたいと思っています。また、地域医療の連携に関しては、一人の患者さんの急性期から自宅復帰までの診療に

して多くの合併症を持つ患者さんや難治性の患者さんの診療に取り組んでいくことが求められます。高度急性期医療を主体的に担う病院として機能分化をさらに推進していく必要があります。一方で、機能分化だけを急いでは、患者さんへの医療提供体制が不備になるリスクがあります。やはり病院機能の分化とともに、地域連携の強化が必要です。病院と病院の「病病連携」や「病病連携」の「病病連携」を強めて、患者さんが安心して医療や介護ケアを受けられる体制をつくることが大事です。

熊本県医師会
ふくだ しげる
福田 稠 会長

久留米大学医学部卒、熊本大学医学部大学院研究科修了、国立熊本病院勤務を経て1981年、福田病院院長就任。2004年～2010年、熊本県医師会会長。2010年から熊本県医師会会長を務める。専門は産婦人科全般。1週産期。

あたる複数の医療機関が共有して使用する診療計画表である「地域連携パス」が、全国でいち早く始まったのが熊本です。がん治療の経緯を記した「私のカルテ」も、連携によって成功している事例です。そうした取り組みをさらに発展させて、熊本モデルとして発信していけたらと考えています。

福田：喫緊の課題は、地域医療構想の策定です。将来の医療需要に対して、新しい地域医療をどう組み立てていくか。ただし、この構想は、国が医療や介護の費用を抑制しようとするスタートしたもので、必ずしも県民のためになると言えない側面があります。そこを何とか知恵を絞って、限られた条件の中で、医療や介護の質を落とさない医療体制をつくらないといけない。熊本の明日の医療のために、私も力を尽くします。

熊本には、熊本大学の研究と教育があり、大学病院での高度医療の実践があり、私たちの日常を支える地域の医療があります。相互の連携も図られています。昨年、ノーベル賞関連の取材で小国町の北里柴三郎記念館を訪ねて思いました。確固たる礎があるからこそ、熊本の医学であり、医療なんだと、この地に宿る大きなエネルギーを感じました。そうした視点で、これからも熊本の医学と医療の発展を見つめていきたいと思います。